
レジェンド オブ ザ ワールド

ムテキング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レジェンド オブ ザ ワールド

【Nコード】

N5482I

【作者名】

ムテキング

【あらすじ】

さあ、伝説のファンタジーの最終章が今、幕を開ける。

第一話 秘宝

そう、世界は大きく3つの世界に別れてある。上世界、中世界、下世界と。そして、その下世界には、恐ろしい、魔界と呼ばれる世界である。こちらの世界では、魔王が地域を征服している世界である。ここでは数々の伝説が生まれていた。魔王と勇者の戦いもこちらで行われていた。危険区域のため、数々の秘宝が眠っているともいわれ、冒険者達は秘宝を求め、挑戦するがほとんどのものが生きて帰ってこれない危険な世界であった。

「実に愉快だ。この地域でまだ俺に逆らう奴がいるとはな」
渋い声が高わらっていた。

「た、大変です。魔王エルノア様。何者かがこちらに攻め込んできているということ・・・」

言い終わる瞬間ドアが蹴破られ、誰かが来た。

「えー、となんだ。あれ、ほら手紙運ぶの、なんだっけ。ほら赤いの、ピザ屋かな。うんピザ屋だ。」

女性の声が聞こえた。

「ええー、ラグナさん！いや、たぶん郵便配達だと」

びびっているような声で答える声が聞こえていた。

「ばちこーん、ものすごい音が聞こえた。」

「自慢か、どっちも配達するからピザ屋でいいだろう。このバカゲリ」

「いてー、まじいた。び、ビンタ？えっえ、意味わかんねー」
くりの姿をした生物はころがっていた。

「貴様等、何者だ。ここをどこだと思っている。この魔王エルノアの城だと分かっているのか、それ・・・うん」

エルノアは部下が驚愕していることに驚いていた。

「え、エルノア様！あれを見てください」

部下はくりの生物に対して震えながら指を指していた。

「あ、あのお方は元三大魔王神の一人残虐魔王くりくりざえもん様でございます」

エルノアは一瞬驚愕の顔をしたあと部下の顔を見た。

「一つ聞いていいか？」

「いいですよ。エルノア様」

部下は答えた。エルノアは部下を呼び寄せ耳元でささやいた。

「三大魔王神って魔王より偉いの？」

「はい、位は上です。ってし、知らないですか。よくそれで魔王になれましたね」

「君ー、最近はコネでなれるんだよ。知らないの、これエルノアの常識略してエルシキ」

部下は思った。こいつはあほだと。

「だがな、相手が魔王神だろうが、格上であろうが、俺の好物が唐揚げであろうがな。かかってこいやあ」

部下は思った。あほだけど漢だと。

「まずはあれだ、その女ぶっ殺してやる」

エルノアはラグナを指さした。

「ええーーーーーーー、魔王神ではない方をですか。そこはかつこよく全員でかかってこいとか言わないんですか」

まじーって顔で部下はエルノアを見ていたが、エルノアは気にせず続けた。

「手出しは無用だ、魔王神。これはな漢と漢との戦いだ。一対一だからな。いいな絶対に一対一だからな」

ものすごく強調していた。

くりくりざえもんはどうぞ後勝手にという顔をしていた。

「いいだろう、ムシヤクシヤしているから丁度良い相手してやるよ。

この大魔王神ラグナがな！」

「ねえねえ、大魔王神って言ってるけど？本当」

エルノアは部下に聞いていた。

「いえ、大魔王神とは聞いたこともありませんね。たぶんでまかせかと……」

「なるほど、ハツタリってことか。私も十八番だ」

魔王は誇らしげな顔をしていた。そして言い返した。

「貴様が大魔王神なら俺は超大王神だ」

ラグナもまた言い返した。

「なら私はミラクル超大魔王神だ」

くりくりざえもんは思った。なんだよそれ。ミラクルって。

「な、ミラクルだと……おい部下よなんかない、奇跡に勝てる名前」

部下は思った。勘弁してくれと。

「エルノア様、実力で黙らせてばいいのですよ」

あー。それだという顔をしていた。

「何がミラクル超大魔王神だ。このハツタリ娘略して八娘が。塵にしてくれる。このミラクル超大魔王神MK2がな」

「なに、超大魔王神MK2だと。じゃあ私は超大魔王神MK3だ」

「なにい、MK3だと!!どうする。どうすればいい部下よ。あいてMK3だつて、こつちMK2だから勝てねえよ」

部下はエルノアに小声でささやいた。

「エルノア様、だからハツタリですつて、だいたいMK2つてエルノア様が言い始めたんですよ。……まったく、ちい、このバカは」

「あれ、今バカつていった?あれこの魔王エルノア様にむかってバカつていった。そんなこというの。まじっ」

おかしいな、なんか威厳がなくなってきたよエルノアピンチ?これっエルピン?

エルノアは気を取り直してラグナに攻撃を開始した。

「まあいい、とりあえず、貴様をぶっ殺してやる。エルノア式ダークマター」

エルノアの指先から鋭い光が発射され、ラグナに直撃した。

「ははは、ばかがこの超大魔王神MK4には勝てないんだ……えっ」

エルノアが勝ったと思った瞬間に吹っ飛ばされていた。
ドカッと壁にぶつかる音がした。

「え、エルノア様!？」

部下は何が起こったか見えていなかった。

「これがラグナ式でこぼちんだ。超大魔王神M K 5を甘く見るなよ」

くりくりざえもんは思った。だんだん増えてきている!?

私は夢を見ているのであろうか。まがりなくとも、エルノア様は魔王の最低レベルにあります。その魔王エルノア様がまるで大人と赤ん坊、いやミジンコ、それ以下の力の差があるとは。この娘いったい何者だ。

すると、まるで私の心を読んだのごとく、娘がしゃべりだした。

「ふつ、私が何者か知りたいようだな。その部下よ。仕方がない
教えてやろう。私は超大魔王神MK6だ」

「
なんでやねん」

すかさず、くりくりざえもんが突っ込んだ。

「なんでやん、なんでやん、なんでーやねん。って三回も同じこといわすなや。ちゃうやろ、ちゃうやろ、ちゃうちゃうちゃうやよ。」

[illegible]

すかさず、ラグナも突っ込み返した。

その光景に部下はぼーぜんとしていた。

それもそのはず、元残虐魔王のくりくりざえもんに対して突っ込みをいれているからである。そう、魔界は、なんといつても実力の世界である。しかも魔王神といえば、圧倒的に高い位である。しかも残虐魔王の名をもつくりくりざえもんに突っ込みを入れるなんて考えられない。普通なら即効に命を消されるはずである。

「はっ、エルノア様？」

部下はエルノアの様子を見たが、完全にＫＯされていた。しかもデ

コピン一発で！

部下はエルノアに駆け寄った。

「エ、エルノア様？」

するとエルノアは答えた。

「おい、俺今どうなった。相手をやつつけた？」

「い、いえ、あの指先一つでやられました」

「うそ、冗談だろ」

「いえ、本当です」

「冗談上手くなってるね、部下よ」

「いえ、違いますよ。じゃあ、なぜ、あなた今、倒れているの？」

「えっ、うそ、えつまじ？」

エルノアはゆっくり自分を確認した。

「あつ、本当だ。俺倒れている。魔王なのに？」

「エルノア様、裏切つてよろしいですか？」

部下は聞いてきた。

「えっ、やめてよ。ひどくない？そんな人として最低じゃないの？」

「いやでも、私、悪魔なので」

「何言つてんの、忠誠心はそう、忠誠心は大事でしょ。部下」

「えー、では、私の本名分かります」

「………部下？」

「あの、こいつ好きにしてください」

部下はラグナ達にエルノアを差し出した。

「え、ちょ、ごめん、ごめんなさい、やめて」

顔の前で手をぶんぶん振りながらいやああーと叫んでいた。

ラグナはエルノアに近づき、胸倉をつかんだ。

「おい、ここにエメラルドマスターあるか？」

「やめ、殺さないで……エメラルドマスターですか？は、はい、

ございます。おい部下」

部下は慌ててエメラルドマスターを取りにいった。

「こちらでございます」

部下はラグナにエメラルドマスターを渡した。

「おい、くり。これでいいのか？」

くりくりざえもんはエメラルドマスターを見た。

「ああ、これでOKだ」

「よし、帰るか。邪魔したな」

ラグナ達は帰って行つた。

「……助かったのか？部下よ」

「……ええ、エルノア様」

二人は足がすくんでしまった。

「よかった、よかったよ部下」

「ええ、本当に命があるってすばらしい」

二人は抱き合っていた。

第2話 過去

「これで、五〇〇〇年前に行けるんだな」

ラグナは聞いた。

「ああ、行けるぜ」

くりくりざえもんが答えた。

「よし、ラグナチーム行くぞ。はい点呼くりからな」

「一」

くりくりざえもんが答えた。

「二」

シャンドンテが答えた。

「三」

ラグナが答えた。

「よし、全員だな」

ラグナが言った。

「それでは行くか。過去に」

くりくりざえもんが言った。

「あの、アタシンジさんがいませんよ」

シャンドンテが言った。

「アタシンジって誰？」

くりくりざえもんが言った。

「いや、何言ってるんですか？仲間でしょう？」

シャンドンテが言った。

「仕方がない、おいシャンドンテ。アタシンジの部屋を見て来い」

ラグナが言った。シャンドンテはすぐに駆け足でアタシンジを呼びにいった。

そして、3分後シャンドンテが慌てて戻ってきた。

「た、大変です。ラグナさん。くりくりざえもんさん。アタシンジさんの部屋にこんな手紙が」

シャンドANTEは手紙をラグナに渡した。

「ラグナさん、あほくり、シャンドANTEお元気ですか？僕は今500年前の魔界に来ております。先のクロノエンペラーとの戦いの後、負けた人は敗戦ルームに飛ばされましたね。しかし、そこでクロノエンペラーの基地が爆発すると放送がありましたね。ラグナさんはご存じないかもしれませんが、そこにいるあほくりとシャンドANTEは覚えているはずですよ。その直後、くりくりざえもんが外に出れる空間を作ってくれました。やった、これで助かると思います僕は真っ先にその空間の穴に入りました。しかし、出た場所は僕の見知らぬ土地でした。それからしばらく僕は歩いていました。自分がどこにいるかを調べるために。すると見覚えのある男と僕は出会いました。そう、くりくりざえもんですよ。僕は声をかけました。するとあほくりはいきなり攻撃してきました。僕はまさかくりくりざえもんが攻撃してくると思わなかったので、油断しました。攻撃の爆風で僕は飛ばされてしまいました。

しかし、そのおかげで、僕は村に辿りつく事ができました。そこで5000年前だと言うことが判明しました。すると、そこにムテキングがいました。しかし、僕はあまりよく知らないで、声をかけませんでした。無視しました。とりあえず、この手紙だけでも未来に届くように僕の全魔力を使い送ります。早く助けに来てください。僕はラグナさんを信じています。シャンドANTE、お前は良い子だからラグナを説得してね。あほくり、お前は絶対来いよ。じゃなきゃ、恨んでやるからな。おそかったら過去の自分を後ろから近付きばこつてやるからな。急げよ」

「……だつて」

ラグナが手紙を読み終えた。

「皆、ちよつといいかい？」

ラグナが皆を集めた。

「この私も含め、三人だけアタシンジって、あの頃からいなかったの知ってた？」

ラグナは聞いた。

「いや、俺はてつきり、秘密基地でふて寝しているかと思って気にしてませんでした」

くりくりざえもんは答えた。

「僕は、ラグナさんが任務を与えているからいないのかと」
シャンドンテは答えた。

「なるほど、それでは作戦をここで少し変更する。今回の目的はムテキングいや、私のお父さんが5000年前にいたことが分かったので、救出しに行くのが目的だったが、そこにアタシンジもいるのでついでに助けようと思う」

ラグナは話した。

「えー、まじで、アタシンジも探すの。めんどくさい、だって、手紙飛ばせるんだったら、自分を飛ばして戻ってきたらいいのに。あいつあほか？」

くりくりざえもんが答えた。

「たぶん、頭が混乱していたんだろう。まあ今から5000年前にいくぞー」

ラグナ達は5000年前に移動した。

第三話 格差

「魔王神くりくりざえもん様万歳」

魔王や魔人、はたまた魔物達が讃えていた。

「うむ、悪くない。それでは奴隷ども、今すぐにムテキングの首を持ってこい」

くりくりざえもんは魔王や魔人たちに命令した。

その時、ラグナ達が丁度、魔王神くりくりざえもんの目の前に現れた。

「……誰だ？」

魔王神はラグナ達を見ていた。

「ここは？どこだ」

ラグナは回りを見回した。

「うん、なんか見覚えがあるな？」

くりくりざえもんは回りを見ていた。

「あつ、俺がいる？というところはくりくり城か？」

「なんですか？くりくり城って、てか皆さんこちら見てますよ」
シャンドンテは焦っていた。

「おい、サタン」

魔王神はサタンを呼んだ。

「はっ、魔王神くりくりざえもん様」

「消せ」

「はい、すぐに。よし、ルシファー、ベルゼブブ、アザゼル、グゼファン侵入者を殺せ」

「はっ」

「殺す」

「ただちに」

「うごおー」

五人の魔王神くりくりざえもんに使える奴隷達がいつせいにラグナ

達を襲った。

だが、一瞬で蹴散らされた。ラグナによって。

「貴様ら、礼儀を知らないのか？」

ラグナは聞いた。

「ほうー、家畜の分際で、奴隷を倒すとは、使えねえ奴隷どもが、主の手を使わせやがつて。よかるう、この残虐魔王神くりくりざえもん様が消してやるよ」

くりくりざえもんが王座から立ちあがった。

「死ね……………うごお」

ラグナがくりくりざえもんの上に馬乗りをし、拳で殴りまくった。

ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ。

「てめえ、くりの分際で、いつからそんなに偉くなった？えっ、このラグナ様に本気で勝てると思ってるのか？おらあ」

ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ。

ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ。

ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ。

「えっ、ちょ、だ、誰、か」

魔王神くりくりざえもんは頭の中がパニックになっていた。

「あの、くりくりざえもんさん？止めなくていいんですか？」

シャンドANTEは聞いてきた。

「何が？」

「何がって、あんた、やられているんですよ。過去の自分が。止めなくていいんですか？」

「ふん、あんなザコ介知らないな。あいつは俺ではないね。だって俺だったら、ラグナに勝ってるからね。うおいて……………」

くりくりざえもんの顔が腫れてきた。

「え、あれ、くりくりざえもんさん、どうして急に？顔が腫れてますよ」

シャンドANTEが驚いた。

「いてー、超いてーよ」

くりくりざえもんが地面に転がりこんだ。

「じゃ、シャンドンテ。あいつを、ラグナを止めてくれ、いて、た、頼むー」

くりくりざえもんが顔を抑えながらころがりこみながら言った。

恐る恐るシャンドンテはラグナに近づき話した。

「・・・あのー、ラグナさん。すいません。もうその辺でやめないと、あちらのくりくりざえもんさんが死にそうです」

ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ。

「えっ、なんで？今おしおきちゅうなのに」

ラグナは不服そうであった。

「いや、ラグナさん、たぶんですけど、くりくりざえもん過去のくりくりざえもんさんは繋がっていますよ」

「だから？」

ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ、ドカ。

ラグナは気にせず、殴った。

「いてーよおー」

くりくりざえもんが叫んでいた。

ラグナは気絶している。魔王神を殴った。

「いてーよお」

くりくりざえもんが叫んでいた。

この行為が46回繰り返された。

「ふうーちよっぴりスツキリしたよ」

ラグナは笑顔であった。

「ようし、お前ら全員正座だ」

ラグナは先ほど、魔王神くりくりざえもんが座っていた王座に座った。

くりくりざえもんをはじめ、シャンドンテ、魔王神、そして魔王神の部下達が正座した。

ラグナが話し出した。

「全く、おまえらはなっていない。おまえはあーほーか」

魔王神を指差した。

「前に出て来い、教育してやる」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

魔王神は無視をしていた。

「おい、貴様、聞こえんのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

魔王神は無視をし続けた。

「そうか、ならば仕方がない」

ラグナは立ちあがり殴った。

「いてえ、えー。お、俺？」

そう、ラグナはくりくりざえもんを殴った。

「ああ、だってあれは過去のお前だろ。自分がしたことを償うのは当然でしょ？」

くりくりざえもんは、魔王神に言った。

「おい、いいから、言うことを聞いとけて？じゃないと、俺が殴られるんだぞ。しかも俺って、5000年後のお前なんだぞ。分かる？結局お前が殴られるんだよ、5000年後に。分かるでしょ。」

あいつの拳まじで痛いよ。しゃれになんねーって。いや、お前も分かるだろ、さつき殴られたからね」

くりくりざえもんは過去の魔王神を説得していた。

しかし、くりくりざえもんの説得は聞き流しながら、魔王神は心の中で思っていた。

さっきまで、あそこの王座に座っていたのは俺なんだと。おかしいよ。これ、俺はそう魔王神、誰もが恐れる残虐魔王よ。指を上上げれば、世界の三分の一が一瞬で消え去るんだよ。この力で全ての物を黙らしてきたんだよ。今まで。ほら見てみるよ、サタンなんか泣いているよ。あのサタンよ。地獄（魔界）の支配者であり、すべての悪魔を統べる王であった、あのサタンも、そして、名高いルシファー、ベルゼブブ、アザゼル、グゼファン達もまるでおとなしい

猫見たく、びくびく震えていた。これでいいのか？えっ、俺はよ、魔王神くりくりざえもんだぞ。あいつらを束めているものだけ。手本を見せてやらねーとな。魔王神はするどい眼光でラグナを睨みつけた。

「ほうー、何だその目は」

ラグナは魔王神を睨み返した。そしてゆっくりと立ち上がった。

「おい、ラグナと言ったな。二人きりで話したい。こちらの部屋に来てもらおうか」

魔王神は話した。

「いいだろう。残りの奴ら、休憩だ」

ラグナは魔王神についていった。

魔王神はラグナが部屋に入るのを確認してから、鍵をかけた。

「で何の用だ」

ラグナは尋ねた。

すると、そこには泣き崩れた魔王神の姿があった。

「ご、ごめんなさいー」

魔王神はラグナの足元にすがりついた。

「すいませんでした。何でもします。靴を舐めろと言われでは靴を舐めます。だから、だから、殺さないで下さい。お願いします」

ラグナは腕を組んで考えていた。

「なんか、芸をしろ」

「げ、芸ですか」

「早くしろ」

「え、えーと、変身します。くりに」

魔王神はくりに変身した。

「で、それから」

ラグナは問いただした。

「えー、くりに変身して、びっくりくりくり、くりっくりなーんちやって」

魔王神は恐る恐るラグナの顔を見た。

「ははははっばかクリいいぞ、もっとやれ」

ラグナはご機嫌であった。

「あっ、はい、やらせていただきます。はいっ、はいっ、びっくりくりくり、くりっくり、びっくりくりくり、くりっくり？」

すると、ラグナは魔王神の頭をつかみ、持ち上げた。

「おい、調子のとてんじゃてめー」

ええー！ー！ー！、魔王神は何、この人、いややわーと思っていた。

「待てよ、よし、お前がおもしろいかどうか判定してやる。さっきのを、皆の前でやって判定しよう、よし、こっちこい」

ラグナは魔王神の頭を驚掴みし、皆が待っている部屋に戻った。

「はい、注目。今から、こいつが一発芸します。見てね」

そこには、クリの姿をした。魔王神がべそをかきながら立っていた。
「んっぐ、んっ、そ、それでは一発芸し。ぐず、します。はあー、びっくりくりくり、くりっくり」

シヤンダンテやくりくりざえもん、そしてサタン達はかわいそうな目で見ていた。

サタンは思っていた。

おいたわしや、魔王神くりくりざえもん様と、魔王神との思い出を思い出していた。

「おい、サタン？」

「なんででしょうか？魔王神くりくりざえもん様」

「手を出すなよ。俺が全て片付けるからな」

「えっ、でも、奴らは魔王神ムテキング護衛の四天王、冥界王ハデスに閻魔大王、ラハブ、ヨルムンガンドですよ」

「いいから、見てろ」

「ハッ、全軍に次ぐ、只今より、魔王神くりくりざえもん様が敵を迎える。絶対に手を出すな」

サタンは自軍に伝えた。

「ははは、見とけよ。この魔王神くりくりざえもん様の力をな」

魔王神くりくりざえもんは、ハデス、閻魔大王、ラハブ、ヨルムンガンドの前に立ちはだかった。

サタンはその光景を見ていた。

魔王神くりくりざえもんが剣を出し、それを振りかざした瞬間にハデスが倒れた。

続いて、魔王神くりくりざえもんが手を閻魔大王に向けた瞬間に閻魔大王は倒れた。

そして、鋭い眼光で残りの敵を睨んだ瞬間にラハブ、ヨルムンガン ドが倒れた。

サタンは崇拜していた。魔王神くりくりざえもんを、この方に勝てる方なんてこの世にいない。この方こそ、神いや仏、サタン？そんなやすっぽい言葉では彼を表現できない。彼こそは全知全能のすべてを統じるものと。その魔王神くりくりざえもん様が？一発芸をしてるなんて、なんておいたわしや。これは、悪夢だ、そう、夢なんだ。夢ならはやく覚めてくれ。頼む神様――。

しかし、目の前の光景は相も変わらず、魔王神くりくりざえもんが一発芸を披露していた。

サタンやルシファー、ベルゼブブ、アザゼル、ゲゼファンが心痛めている中、そんなこと関係なく笑っている奴がいた。そう、未来の本人、くりくりざえもんである。

「おいこらあ、ばかじゃねーぞ、ぷぷ。もっと腰振れよ」

くりくりざえもんはヤジを飛ばしていた。

「あのう、くりくりざえもんさん？平気なんですか？」

シヤンダンテは聞いた。

「何が？」

「いや、何がって、あれ過去のくりくりざえもんさんですよね？」

「そうだよ」

「あんなこと、やってますけど、止めなくていいんですか？」

「ふん、シヤンダンテ、いいかい？あいつは俺であって、俺ではないからな」

「はあー？」

「後な、シャンドンテ、あのロリっ娘ラグナを止めれるか？」

「……無理ですね」

「だろ、それにこれで少しはあいつが変わるきっかけになってくれるだろう」

くりくりざえもんは過去の自分を見ていた。

「はあー、そんなものですか？」

シャンドンテは聞いた。

「そんなものだよ。シャンドンテも3000年くらい経つと分かるよ」

「いや、僕人間なんで、あと7・80年ぐらいしか無理ですよ」

「がんばればいい。しかしシャンドンテお前はラッキーだよ。中々人間でこのような体験できないよ」

「……僕もそう思います」

シャンドンテは思っていた。この人達に助けてもらわなかったら、こんなすごい体験なんてできないと。ただ、くりくりざえもんさんの事は大人だなあと思っていた。

第4話 報道

「魔王神様、魔王神くりくりざえもん様、大変です」
ものすごい形相した。とても大きな蛇があらわれた。

「どうした、ナーガ？あつい」

魔王神くりくりざえもんが聞いた。

「おい、何勝手な事をしているんだ。くり」

ラグナ魔王神くりくりざえもんの背中をふんづけた。

「えっ、あつ、え、魔王神くりくりざえもん様？え」

ナーガは驚きを隠せず、ただ、驚愕していた。

「ああ、いいよ。話して」

くりくりざえもんが言った。

「えっ、あれ魔王神様が二人？え、ええ」

ナーガはサタン達の方を見たが。サタン達はとりあえず、話をしろと目と目で伝えた。

「え、えーと、実は先ほど、無の魔王神ムテキングが死んだという情報が入りました」

「・・・・・・・・えええー・・・・・・・・」

その場にいた一人を除いて全員が一瞬、戸惑った後、驚いた。

「どういうこと？え、それ本当？」

誰よりも早く、ラグナはナーガのに聞いた。だした。

「ええ、はい。確かな筋の情報です。これを見てください」

ナーガは口からモニターを出した。モニターから、ニュース番組が流れた。

そこには、見たことがある人がレポートをしていた。

「はい、こちらレポーターの早く未来に帰りたい皆が大好き、勇者アタシンジです。見てください。この風景を、そうここは、皆様にご存じの魔王神のムテキングの城です。はい、ここでお葬式が行われています。それでは、さっそく中の様子を見てみましょう」

そこには、豪華な棺桶があり、その回りには、ムテキングの部下がとりまわっていた。

「それでは、私、さっそく、話を聞いて見たいと思います。実は、冥界王ハデスさんに来てもらってます。それではハデスさんお願いします」

アタシンジはハデスにマイクを向けた。

「どうも、皆様、魔王神ムテキング様につかえる四天王の一人、冥界王ハデスです。ありえないと申しますが、ありえたので、すいません、あまりにも突然のことだったので、悪夢です、本当に悪夢だったんです」

冥界王ハデスが涙ぐみながら話し出した。

第5話 二人

「なあ、インフィニット。お前負けてんじゃん。女に・・・ぶ、だせー」

「・・・・・・・・・・」

Edgeは、顔をにやにやさせながら笑っていた。

「あーあ、情けねえな、ほんま、なさけないわあ。あの天下の剣士インフィニット様が、女の子に負けるなんて。がっかりでんね」

「・・・・・・・・・・」

「もしね、もしこの俺、Edge様が戦っていたら、ちよちよいのちよいつてやつつけていたね。例え、男に負けても、女には負けない。夜以外はね。うーん、まあ、情けないね」

「・・・・・・・・・・てめえーは、腹を壊して戦ってもない奴に言われたくないわ」

インフィニットも腹が立ち、言い返した。

「お前、ばかか、あれはな、あれは、あれはー、くりくりざえもんと戦っていて、疲れてんだよ。もし体力が完全だったら・・・・・・・・」

「だったら？」

「・・・・・・・・・・」

「完全だったらどうした・・・え、あいた」

「うるさい、黙れ、静かにしろ」

インフィニットはEdgeを殴った。

そして、インフィニットは突然短剣を取り出し、自分を切った。

「え、ええー、インフィニット？何をしているんだ」

「・・・・・・・・けじめだ」

そう、インフィニットは自分の長い髪の毛をバツサリ切った。

心の中で、思っていた。勝てない？あの娘には勝てない。例え、体力が完全であるうが、今のままでは勝てないと。あーくそ、まじかよ。何でだよ。よりによって。とにかくもっと、強くないとい

けない。もう誰にも負けたくない。

インフィニットは後ろを向き、Edgeに言った。

「行くぞ、ムテキングを探しに」

「・・・ああ」

Edgeは思った。俺は負けても、髪の毛と髭はそらないと。あと、笑いたいと。でも笑ったら、インフィニットに殴られると思うからやめた。

第6話 三人

> i 3 1 5 4 — 2 5 9 <

Edgeとインフィニットの二人は歩いていると小さな村に着いた。
「あれ？Edge？なんか、村の人、お前見てない？」

インフィニットは村に入ってから妙に村の人がEdgeの顔を見ていた。

「そりやそうだろ、こんな色男、世界いや生きとし生きるもの、全てを超越している美しさだからな、それに、髭に胸毛完璧だ。ちなみにすね毛にはパーマも当ててる。見えないところを綺麗にするそれおしゃれのプロフェッショナルさ」

「ペラペラ、よくしゃべるね。7年たつても、全く変わらないな。よく見るよ、村人たちの目を。あれ、あの人、ヘンタイじゃないの。早く村から出て行って欲しいわ。じゃないと、その髭と胸毛とすね毛そりたくなっちゃうって言ってるよ」

「それはねえーよ。珍しいんだろ、旅人が。さつさと飯でも食いに行こうぜ」

「あつ、分かった。Edgeお前、ビッグバン2号だからだ」

「えっ、インフィニット、お前、ビッグバンを知っているのか？」

「いや、今知った」

「どうやって？」

すると、インフィニットは村の掲示板に張ってあるポスター？を指差した。

「はっ？えっ？」

「おつ、今、絵とえをかけたな。Edgeさすがさすらいのボケヒーローだ」

「いやいやいや？何これ？はあ、俺こんな事いった覚えねーし、ビッグバンは死んだはずでは？」

Edgeが不思議に思っている時、Edgeにとって懐かしい声が聞こえた。

「コスモを守って43年、誰だ誰だと騒ぎだし、銀河の英雄それは誰、誰か誰かは分からない、しかし、本当は知っている。その正体はコスモヒーロービッグバンだ」

「え、え、え、え、何故？生きてる？」

「なぜかって？ヒーローは死なない。なんたって、正義の味方だからね」

「び、ビッグバン」

「Edge……」

二人は手を広げ駆け寄った。そして抱きつこうとした瞬間、Edgeがジャーマンスープレックスをかました。

「ふざけんな」

「ぶへえ」

「おー、ブンドキ見たいに綺麗な形だ」

インフィニットは感心していた。

「どうして、生きてるか説明しろよ。あのポスターもな。じゃないと俺がお前を殺す」

「分かった、分かった。言うよ、言います。とりあえず、食事でもしながら話そう、ほらインフィニット君も」

「え、なんで俺の事、知ってるの？」

「ははは、それも話すから、とりあえずあそこの店に」

三人は、食事のできる店に行った。

第7話 一般

「というわけなんだよ」

ビッグバンとEdgeとインフィニットは食事をしていた。

「いやいやいや、いきなり、というわけなんですよと言われて分かるはずないだろ、ビッグバン」

Edgeは聞き返した。

「なるほどな。大変だったんですね。ビッグバンさん」

インフィニットは言った。

「ははは、ビッグバンでいいよ。インフィニット君」

ビッグバンは答えた。

「いや、だからね。というわけなんですよって言っただけでしょ。それだけで、分かるはずないでしょ」

Edgeはもう一度言った。

その時、ビッグバンの平手がEdgeの顔を叩いた。

そう、もう、赤ちゃんにお尻ぺんぺんするわよと、お母さんが注意するみたいに。

「いてえ、何するんだ、えっ」

言い返そうとした瞬間、Edgeの顔にもう一発衝撃が走った。

そう、インフィニットも。

「なんで？二人とも？」

Edgeが聞き返した。

「理解しないからだ」

ビッグバンが答えた

「ノリで」

インフィニットも答えた。

「おまえら、おかしいだろ。というわけなんだで分かるかよ。インフィニットお前は理解しているのか」

Edgeは聞いた。

「当たり前だのインフィニットだ。教えてやろう。というわけなんだの意味を」

インフィニットは話したした。

「というわけなんだ」

「なるほどな、さすがインフィニット君だ」

ビッグバンは感心した。

「いや、いや、同じかい、また同じかい、いや分からないよ。というわけで分かるわけないよ」

Edgeは答えた。

するとまた、

その時、ビッグバンの平手がEdgeの顔を叩いた。

前と同じく、もう、赤ちゃんにお尻ぺんぺんするわよと、お母さんが注意するみたいに。

「またかよ、いてえ、何するんだ、えっ」

言い返そうとした瞬間、またもEdgeの顔に一発衝撃が走った。そう、インフィニットであった。

「なんで？二人とも？」

Edgeが聞き返した。

「何度も何度も理解しないからだろ。せっかく、インフィニット君がわかりやすく、ああ、わかりやすく教えてくれたのに」

ビッグバンが答えた。

「今回は、ビンタしていいでしょう」

インフィニットは、自信満々の顔で答えた。

「いやいやいや、というわけで分かる方がおかしいだろ。だれがわかるんだよ。というわけでだけで。お前らおかしいだろ。い、いてー」

Edgeが言い放った瞬間、またまた、顔に衝撃が2度走った。

「ばかやろう、世間一般でおかしいとか、常識とかあるだろ。それはな、平均してのことだ。分かるか、この場合はね、私とインフィニット君が理化している。そして、理解していないのは、Edge

君一人だ。だからねこの場合おかしいのは、Edge、君なんだよ」
ビッグバンが上から目線で言った。

「そのとおり、お前は変態だ」

インフィニットも続けて言い放った。

「・・・ぐっ、こいつらぁー」

Edgeは心の中で思っていた。こいつらムカつく。素直に思っていた。

「はぁ、仕方がない。あほにも分かるように話してやるから」

ビッグバンがやれやれという顔をしながら言った。

「全く、あほがいると苦労するぜ」

インフィニットは4、まるで人を虫けら扱いのような目で見ていた。
Edgeは心底、こいつらが憎いと思っていた。素直にね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5482i/>

レジェンド オブ ザ ワールド

2010年10月13日23時22分発行